「ブルーマングループ」バックステージツアー

濱野祐二

昨年12月の公演開始以来、連日大反響のパフォーマンスショー「木下工務店presents BLUE MAN GROUP IN TOKYO」のバックステージツアーを東京支部N.G.Cで開催しました。今回のバックステージツアーには当日18名の参加があり、そのうち約半数の参加者は本番のショーを観劇。バックステージで見学、説明、解説いただいた、新しい機材や技術が駆使されるショーは、驚きと発見がたくさんあり、内容がとても濃いツアーとなりました。

インボイス劇場前

専用劇場「インボイス劇場」

3月26日（水）の午後、東京・六本木にある「インボイス劇場」というブルーマングループ専用劇場の前で集合。当日券入手のために早い時間から劇場に座り込む一般客を尻目に、バックステージツアーの一行は裏口から劇場入り。今回、私たちを出迎えてくれたのは、このブルーマングループ東京公演全体のテクニカル運営部分のマネージメント及びスーパーバイザーとして関わっている並木さんと、照明オペレーターの今井さん。おふたりとも（株）PRGアジアの方です。ちなみに、この劇場公演の照明だけでなく、映像をはじめとする技術的セクションを（株）PRGアジアが受けているとのことでした。

お世話になった今井さん（左）と並木さん（右）

少し退廃的な工場の廃屋をイメージした会場ロビー（写真は開場前）

劇場の外観はブルーマンの「青」でしたが、客席へ入ると劇場内は「黒」でした。ブラックライトと蛍光塗料を使うショーの性質上、舞台や客席、壁面が黒っぽいことはいうまでもありませんが、照明機材に施されている徹底した明かりモレ防止とハレーション対策が、さらにその効果を倍増。本番のショーに観客が集中できるだけでなく、客電が点灯した開演前の雰囲気作りにも、この劇場の「黒っぽさ」は一役買っています。東京公演の劇場キャパシティは900人。ロンドンまたはアムステルダムと同じくらいの規模だそうです。

インボイス劇場内

ブルーマングループは観客参加型のライブショー

多分、雑誌やテレビ番組などで、すでにブルーマングループのことは、皆さんご存知かと思いますが、ここで簡単に説明。「ブルーマングループ」とは、顔を青1色でペイントした3人組のパフォーマンスグループ。80年代後半、ニューヨークの路上でパフォーマンス活動を開始し、91年にオフ・ブロードウェイの小さな劇場で初公演。ボストン、シカゴ、ラスベガスと、10年ほどアメリカ国内で上演され、その人気が世界に飛び火。ベルリン、アムステルダム、オーバーハウゼン、ロンドンなどの世界各都市で公演を行い、昨年12月よりアジア初となる日本でのロングラン公演を東京・六本木で開催。

インタラクティブなショー内容は、一方的にサウンドやアート、パフォーマンスを見てもらうという形式ではなく、お客さん自身も公演に参加する「観客参加型のライブショー」。言葉を発しないブルーマンと、選ばれた観客とのやりとりは見ていて面白く、終演後は出口でブルーマンたちが観客を見送りしてくれます。記念写真も気軽に応じてくれる風景は、本場・ニューヨークと全く同じだといいます。今回のバックステージツアー後、実際にブルーマングループの公演を見て、日本ではなかなか見られないタイプのショーだと思いました。

客席上の照明仕込み

ブルーマングループのために建てられた東京公演の専用劇場は、構築・設計も（株）PRGアジアが担当。ブルーマンのパフォーマンスに最適なように造られています。照明デザインのプロットは、アメリカのオーランドに似せているとのこと。客席の上にはトラス構造のラダーがあり、トラスをキャットウォークに取り付けて、なおかつ、天井のキャットウォークから吊り点を取って固定しています。もちろんアップダウンも可能です。

トラスによって、この列はムービングライトのバリライト（VL1000）、あの列はカラーチェンジャー付きのソースフォー、向こうのトラスは日本でいうフロント・前明かりの役目をしているソースフォーとのムービングライト（Mac2000）と、大まかに機材と役割ごとの区分ができる様子。それらトラスに、客席とステージ全体が当たるように仕込まれているUVスポットとストロボ（Atomic3000）も一緒に吊られています。

ブルーマングループの公演では、ショーの本番や客入れのときにソースフォーを使っています。ゴボが入っているものは客席あて、入っていないものは演目で使うという形で、それぞれのソースフォーの中でも、あてるものによって度数を変えているそうです。

演目の中でブルーマンが客席に降りていくシーンがあり、観客席のイスの上を歩きます。それをあてるためのソースフォーは、観客席から見ても「低い」と感じる位置に吊られていました。本来、仕込み図上では、もっと上にあったものだったそうですが、どうやっても図面通りの位置では明かりがあたらないので、エクステンドして下に伸ばしたそうです。しかし、そのままだと光源が観客にも見えてしまうので、トップハットを取り付けて、観客に光源を見せない工夫もしています。

用語・名称は英語が基準

さて、実際にバックステージを回る前に、ときには見て歩きながら、この専用劇場での基本的な舞台用語を（株）PRGアジアの方々から説明していただきました。ニューヨークが本拠地のブルーマングループの場合、日本の東京公演においても、やはり英語での呼び方と表示に統一。日本の場合は観客席から見て右側を「上手」、左側を「下手」と呼びますが、英語ではステージから見て左側を「レフト」、右側を「ライト」と呼ぶことになります。当日のバックステージツアーで閲覧配布（持出禁止）された仕込み図も英語表記。私たちバックステージツアー参加者は「ライト・バンド・ロフト（下手側のバンドロフト）」など、説明を基本的に英語名称で受けました。ちなみに、ステージの前奥は、「ダウン・ステージ」が舞台前、「アップ・ステージ」が舞台奥。客電の名称は「フロント・オブ・ハウス」で略称「FOH」。そのほか日本とは異なる公演におけるポジションやセクションの違いも、わかりやすく説明していただきながら、バックステージツアーは進んで行きました。

パフォーマンスを支える舞台の工夫

ブルーマンのメインパフォーマンスとして行われるパーカッションライブ。その中に、叩いたドラムの上に塗料を注ぎ込んで、彼らがそれを叩くたびに、きれいなカラーの「しぶき」となって周囲に飛び散っていくというシーンがあります。すると当然、公演が終了したあとのステージは、この塗料が広範囲に跳ねているため、終演後はステージを水で掃除をします。舞台床面に埋め込まれたLEDのパーライトは水が入らないようにコーキング。舞台床に設置されたムービングライトの周りには、木枠を組んで「堤防」を作り対策しています。機材のレンズについた塗料は水雑巾で拭き取れるとのこと。今まで塗料が原因の機材トラブルはないといいます。

ちなみに、ブルーマンが使っているこの塗料は、アメリカで子ども用に売られているものです。ショーの中では実際にブルーマンが口に含むもので、万が一、飲み込んでしまったとしても、身体には害のないものを使っています。

ところで、この塗料を使ったパーカッションの照明は、実にシンプルな仕組みでした。ドラムの中にスポットが仕込まれ、ドラムの裏にあるフットペダルで、演者であるブルーマンが自身のタイミングで点灯させているとのこと。きれいなカラーの「しぶき」は塗料そのものの色で、スポットは生のまま仕込んでいます。

また、パーカッションによるパフォーマンスには、オートメーションによって舞台両側に敷かれているレールの上を楽器が移動して、センターでドッキングするものもあります。この楽器の中にアップライトであったり、ストロボ、フェイスライトも仕込まれ、細かいけれど確実にブルーマンたちをショー空間の中で浮き上がらせています。

ソフト・キュー装置　インカム指示不可のセクションに設置
ランプで「キッカケ」を知らせる

オートメーションは基本的に、セットチェンジなどの舞台機構すべての動きがPCにプログラミングされており、Goボタンひとつで実行できるようになっています。このコントロールは舞台袖のところにありますが、IR（暗視）カメラによって、すべての確認事項をチェックしながら確実、安全にショーを進行しています。

有機ELを使った「ライブ・ワイヤー」

照明家協会雑誌2008年1月号の「LDIレポート」の記事にも書かれていますが、ブルーマングループのショーの中で、「ライブ・ワイヤー」という新しい技術と使い方がとてもユニークです。ネタばらしになりますが、使い方を以下にご紹介します。

『最初、幕に縫われた赤い線画のキャラクターがピコピコ動いていて、ジャンプして着地すると、ライブ・ワイヤーの衣装を着たブルーマンに入れ替わっていて、観客には「CG映像が、実物になっちゃった！」と不思議な感覚を味あわせてくれます。』

PHOTO BY HOWARD ©BMP

©BMP

ここでいう「赤い線画のキャラクター」もライブ・ワイヤーを使っています。ライブ・ワイヤーは有機EL（Electro-Luminescence）という、簡単にいえば「面で光る」素材で作られ、それがセット（幕）の中に細い線状で組み込まれています。組み込まれたもの1つ1つは、全部違うチャンネルで制御することが可能。例えば、それを人の形に編み、ストップモーションで（アニメーションのように）動かせば、まるで人が動いているようにも見せることができるのです。

バックステージツアーの様子

重要なキュー・コーラーの役割

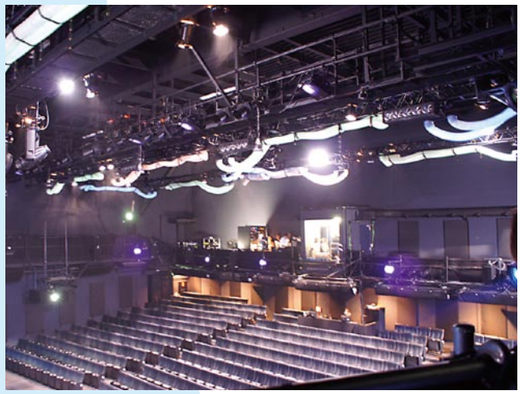
トラブルに対する備えに関して、バックステージツアー中、様々なところでその工夫が見られました。例えば、公演中に映像をスクリーンに映すキャットウォークのメインプロジェクターがトラブルを起こした場合、バックアップとして、舞台奥にあるリア・プロジェクターが稼動し、同じ映像がすぐ映るようにできています。しかも、基本的に映像のコンテンツは、すべてのプロジェクターに同じ映像が流されているので、トラブルになった場合、コンソールのボタンひとつですぐ切り換えられるという話でした。

また、先に述べた「用語・名称は英語が基準」での文中の最後「日本とは異なる、公演のポジションやセクションの違い」に関連して、トラブルがあった場合の緊急対応を考えると、日本における舞台監督の役割の一部を担う、本公演の「キュー・コーラー」の重要な役割を、あとになって（想像だけど）実感した筆者でした。

キュー・コーラーとは、簡単にいうと、公演中に進行されるすべてのキューだけを振る人のことです。日本でいえば舞台監督に似ていますが、舞台袖にはおらず、ステージと客席が見渡せる位置にいます。「キュー・コーラー・ブース」と呼ばれる部屋で、IR（暗視）カメラの映像を確認して、本当にスタンバイができているのだろうか、照明やPA、オートメーションなどがプロット通りにきちんと進行しているのだろうかなど、すべての様子を把握しながら、的確に各セクションへ「キッカケ」を振っていきます。

何かトラブルがあって急な変更が生じるときは、ブルーマンをはじめ、各セクションへ指示を伝える。間違えてもいけないし、とっさにいろいろなことを判断しなければならない。キュー・コーラーは、非常に重要な役割を担っています。

オペレーターとキュー・コーラーは、常にコミュニケーションを取りながら、プロット通りにショーを進めて行きます。バックアップのプランを使わざるを得なかった場合にも、ショーの進行をスムーズに運ぶことができる能力の高さと、アクシデントに対応するプランの存在に、あらためてブルーマングループ公演の「質の良さ」が伺えました。


劇場後方　2階中央の明るい部屋がキュー・コーラー・ブース
その左が照明ブース

キュー・コーラー・ブース

ショーのコントロールはグランドMA

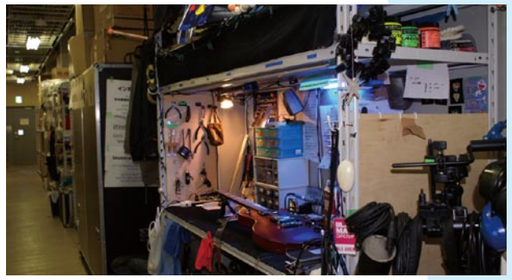
あと、少しシステム的なことを報告しますが、映像システムではメディアサーバーを使用しています。映像やプロジェクター、ライブ・ワイヤー、一部の舞台機構的なものを、照明の「グランドMA・Full」メインコンソールで制御しています。

映像に関しては、グランドMAからイーサネットでメディアサーバーへ。カメラも経路は同じです。カメラのパン、チルト、ズーム、録画、再生もグランドMAで制御。メインコンソールとバックアップ用のコンソール（グランドMA・Light）もイーサネットで常に同期され、すべて同じキューで進行しています。

そのほかはメインコンソールから計4系統のDMXで制御され、ライブ・ワイヤーの特性を生かした緻密な演出と連動したキュー作りが可能になっていました。

ブルーマングループの公演は、海外デザイナーによるシステムなので、スポットは750wを使っています。ディマーシステムも基本的にはスポット1台に対してひとつのディマーを使用。万が一、トラブルを起こした際、そのひとつだけを落とせば、他に影響なくショーができるという形になっています。

ブルーマングループの仕込みには、トータルで1ヶ月間かかったそうです。リハーサルや仕込みのペースが、日本のものとは違うため、まずはそれをお互いに理解し、調整することからはじめられたとのこと。ショーの設備以外には、衣装部屋やプロップス（小道具）の作業スペース、楽器などの消耗品棚、冷蔵庫の中なども見せていただきました。


MIT（楽器）の作業スペース　消耗品棚もバックヤード通路にある

照明コンソールはグランドMA　カメラ、映像関係も同じコンソールで制御

プロップス（小道具）の部屋　冷蔵庫完備　ショーで使用するペイントやゼリー、バナナなどを公演毎に準備

バックステージツアーが終わったあと、本番のショーを観劇して思ったことは、最新技術を駆使した今どきのデジタル的（？）な「すごさ」ではなく、なぜか意外と、アナログ（ローテク？）的なものが強く心に残ったショーだった、ということです。いや、主役のパフォーマンスを最新技術がさらに引き立てたというべきでしょうか？

有機ELを使ったライブ・ワイヤーや、映像のプロジェクターなど、最新の技術を使っての演出ではありますが、それを見事に利用して、それとステージ上で融合できる、ブルーマンたちのパフォーマンス精度の高さに驚愕しました。バックステージツアーで裏側を知ったとはいえ、一体どこまでがマシンの技術であって、どこからがブルーマンによるパフォーマンスのものなのか、振り返って思い出してみても、全く区別がつきません。

一体、どうやればあのようになるのか、1つ1つのプロットをじっくり見せてもらいたい！　ネタばらしのメイキング映像（笑）や、そういうことがわかるワーク・ショップなんてあったら是非参加したい！と思った筆者でした。そういった意味で、舞台の裏側と本番のショーが見られて、非常に素晴らしいバックステージツアーだったと思います。

ゾエトロープ　人型の造形がショーの中でどのように使われるのか見てもらいたい